

生活

林芙美子

青空文庫

なににこがれて書くうたぞ

一時にひらくうめすもも

すももの蒼さ身にあびて

田舎暮らしのやすらかさ

私はこのうたが好きで、毎日この室生むろうさんのうたを唱歌のようにうたう。「なににこがれて書くうたぞ」全く、このうたの通り、私はなににこがれているともなく、夜更ふけて、ほとんど毎日机に向っている。そうして、やくざなその日暮らしの小説を書いていく。夕御飯が済んで、小さい女中と二人で、油ものは油もの、茶

飲み茶碗は茶飲み茶碗と、あれこれと近所の活動写真の話などをしながらかたづけものをして、きりばな剪花に水を替えてやっていると、もうその頃はたいてい八時が過ぎている。三ツの夕刊を手にして、二階の書齋へあがって行くと、火鉢の火がおとろえている。炭をつぎ、てつびん鉄瓶をかけて、湯のわくあいだ、私は三ツの夕刊に眼をとおすのだ。うちでとっているのは、朝日新聞、日日新聞、読売新聞の三ツで、まず眼をとおすのは、芝居や活動の広告のようなものだ。女の心がある、行ってみたいと思う。永遠の誓いと云うのがある、みんな観に行きたいと思いつながら、その広告が場末ばすえの小舎こやにかかるまで行けないでしまうことがたびたびなのだ。

広告を読み終ると三面記事を読む。その三面記事も一番下の小

さい欄から読んでゆく。三ツの新聞に、同じような事が書いてあつても、どれも違う記事のように読めて面白くて仕方がない。政治欄はめつたに読まない。だから私は、小学生よりも政治の事を知らない。——いつだったかも、日日新聞から、議会と云うものを観みせて貰つた。入口では人の懐ふところへまで手を入れて調べる人がいたり、場内へ這はい入ると、四圍あたりの空氣が臭くて、じつとしていられなかつた。真下に視下みおろす議場では、居睡いねむりをしている人や、肩を怖いからせてつかみあつている人たちがいた。それが議員と云う人たちなそうで、もう吃驚びつくりしてしまつて、それきりな氣持ちになつてしまつている。

ひととおり新聞を読み終ると、ちようど鉄瓶の湯が沸わき始める。

もう、この時間が私には天国のようで、眼鏡めがねに息をかけてやり、なめし皮で球を綺麗にみがく。そうして茶を淹いれ、机の上の色々なものに触れてみる。「御健在か」と、そう訊きいてみる気持ちなのだ。ペンは万年筆を使っている。インキは丸善のアテナインキさんごう。三合位さんごうはいつている大きい瓶びんのを買って来て、愉たのしみに器うつわへうつしてつかう。二年位あるような気がする。原稿用紙の前には小さい手鏡を置いて、時々舌を出したり、眼をぐるぐるまわして遊ぶ。だけど、長いものを書き始めると、この鏡は邪魔になって、いつも寢床ねどこの上へほうり投げてしまう。机の上には、何だか知らないけれども雑誌と本でいっぱいになって、ろくろく花を置くことも出来ない。唐詩選の岩波本がぼろぼろになって、机の上のど

こかに載っている。

九時になつても、お茶を飲んで呆^ぼんやりしている。昔の日記を出したりして読む。妙に感心してみたり、妙にくだらなく思つたりする。心の遊びが大変なもので、色々な人たちの顔や心を自由に身につけてみる。あの人と夫婦になつてみたいなと思うひとがあつて、小説を書く前は、他愛のないそんな心の遊びが多い。――十時頃になると、家中のひとたちがおやすみを云いあう。皆が床へつくと、私が怖がりやだから、家中の鍵を見てまわり、台所で夜食の用意をして、それを二階へ持つてあがる。塩昆布と鰹節の削つたのがあれば私は大変機嫌がいいのだ。この頃は寒いので夜を更^ふかしていると軀^{からだ}にこたえて来て仕方がない。なににこがれ

て書くうたぞ、でその日暮らし故、それに、やっぱり書くことに苦しくとも愉しいので机の前に坐つてしまう。腰をかける椅子なので、寒くなると、私は椅子の上に何時いつか坐つて書いている。書いていて一番いや厭なのは、あふれるような気持ちでありながら、字引を引いて一字の上に何時までも停滞していることが、一番なさない。私の字引は、学生自習辞典と云うので、これは、私が四国の高松をうろうろしていた時に七拾五銭で買ったもの、もう、ぼろぼろになつてしまつている。何度字引を買つても、結局これが楽なので、字が足りないけれどこれを使つている。本当に、考えて見れば田舎いなかの女学生みたいな生活だけでも、こうして、私の生活を何か書けと云われると、私は、ぱつとした暮らしでもな

い自分のこの頃に、何とない、おかしなものを感じ始めているのだ。

雨。

今日もまた雨なり。膝小僧を出して『彼女の控帳』をとうとう書きあげる。二十七枚『新潮』へ送る。駄菓子を拾銭買って来て一人でたべた。小かぶと瓢ひょうたん瓜うりを漬けてみる。二、三日したらうまいだろう。母より手紙、頭が痛い。——十二日

雨。

へとへとだ。くだらなく徹夜して読書。——財産三拾七銭はかなや。夜、紫なる寅とらの尾おの花拾銭、シオン五銭買って来る。雨に濡ぬれて犬と歩む。よき散歩なり。フミキリの雨、夜の雨、青く光

つて濡れて走る郊外電車、きわめてこころよし。——十三日

これは三年前の秋の日記だけれども、何かが恋をでもしているような子供っぽい日記だ。いまは、何も彼もか愕おどろきのない生活で、とても、此様な日記はかけない。——昔は、肉親たちがちりぢりに遠く散っていて孤独であったせい、燃えあがるような気持ちだったけれども、いまは私の家にみんな集って来ているので、時々辛いと思う時がある。——昼間は客が多いので、仕事はたいてい夜中だけれど、夜中の仕事は私には少々辛くなって来た。翌あくる日はおぼけのような顔で、ふためとは見られない。寢床へ這入るのが四時頃、七時には眼が覚めてしまう。家の近くに辻山病院と云うのがある。古くからの知りあいで、私はここでこの頃ねむ睡り

薬をつくって貰っている。疲れると、その睡り薬をのんで、昼間でもベッドに横になる。ベッドと云つても、寄宿舎にあるような小さいベッドなので、寝心地が何となく悪く、すぐ眼が覚めるのもベッドのせいかも知れないと思つている。朝、六時か七時には、どんなに寒くても起きあがり、ひととおり新聞を読むのが愉しみ。文芸欄を読み、家庭欄を読み、それから政治面の写真だけを見る。それでおしまい、三面記事を朝読むのは怖いから読まない。一日厭な思いをするから、たいてい、昼すぎにちよいちよいのぞくことにしている。

徹夜の仕事はろくなものは書けないのだけれども、どうしても夜になって、「ああ」とくたびれてしまうのだ。私だけの客でな

く、家のひとたちの客も見える。おかずごしらえ、下着の洗濯、これでなかなか楽な生きかたではない。年齢をとつた女中をおくことも時に考えるけれども、いまの女中は十三の時に来て三年いる。私の邪魔にならないので、何が不自由でも、それが一番幸せだと思つている。第一、女中がいてくれるなんて、マノン・レスコオの中の何かの一節にあつたけれども、なりあがり者の私としては、はずかしい位なのだ。しかも三年もいてくれている。

私は、ひとにはなかなか腹をたてないけれども、家ではよく腹をたてて自分で泣きたくなる。その気持ちはどこへも持つてゆきようがないので、机の前に坐り、呆ぼんやりしている。煙草たばこはバツトを四、五本吸う。昔、好きなひとがあつた頃は、そのひとが煙

草がきらいで吸わなかったけれども、いまはそのひとと何でもなくなつたので、平気で煙草を吸うようになってしまった。やけになる気持ちは大変きもちがいい。私は何度もやけになつて、随分むしゃくしゃした昔だつたけれども、この頃は日向ぼつこひなたみたいだ。——小説の話は大きらい、説明や批評が少しも出来ないからだろう。ほら、お日様みたいな小説よ位の説明ならば指で丸をつくつて、「ほら、こんなに円満なのさア」で、「ああそうか」と受取つて貰うより仕方がないのだ。時々埃を叩くほこりような批評を貰う時がある。辛いなと思うけれども、それで、シゲキを受けることもひといちばいのせいかな、すっかり呆んやりしてしまつて、腐つた、魚みために、二、三日蒲団ふとんをかぶつて寝てしまう。自分の

作品がよくないからだ。一番、自分が知っているから一時はゆき
ばがなくなるけれども、机の前に坐り、また、こつこつ何か書き
始める。私はこれが宗教だと云うようなものがあるとすれば、た
だ、こつこつ書いている。その二三昧境さんまいきようにあるような気がする。
厭な言葉だけでも、私は万年文学少女なのでもあろう。

つい四、五日前、税務所のお役人が来た。お役人と云うと、胸
がどきどきして、ちようど昼食時じきだったけれども、御飯が咽喉のどへ
通らなかつた。私は税金を払い始めてちようど四年になるけれど
も、蔭では実際辛いなと思つたことがたびたびだつた。収入が拾
円の時が三、四度あつたり、ちよつと旅をすると、その収入が止

ったりするのに、税金は私にとって案外立派すぎた。今度も、税金の値上げだったけれども、「年収四千円はありますでしょう」と云われたのは誰のことかと吃驚びっくりしてしまった。よく運んで二百円、悪くいって九拾円、平均百五拾円あったら、ナムアミダブツと月の瀬を越すことが出来る。

「吉屋信子よしやのぶこさんの税金は下手な実業家以上です」と、税務所のお役人が云われたけれども、私は吃驚しているきりで何とも話しようがなかった。一、二枚のものを書いても林芙美子だし、かりそめに、ゴシップに林芙美子の名前が出ていても、それをいつしよくたにしてあれこれ云われるのでは立つ瀬がないから、「どうぞ雑誌社や新聞社で、私が稿料をいつたいいくら貰っているかきい

てみて下さい」と云うより仕方がない。吉屋さんは先輩でブンヤも違ふ。「あなたは文学はお好きでいらつしやいますか」とたずねると、お役人は、学生の頃はそれでもちよいちよい読みました。が、いまは法律をやっていますと云うことだった。感じのいいお役人であつたが、年収四千円は困つたことだと思つた。純文学をやっているひとつつて、案外、派手のようだけれど貧乏で、月五拾円あるひとは、新進作家の方でしょうと云うと、そうですかねえと感心していた。

「その純文学の方は誰が一番収入があるのでしょう」

そんなことも訊かれたが、たいてい名前は派手でも、私と似たりよつたりでしょうと威張つて云うより仕方がない。——十年前

から一度も値上げにならない原稿料で、私は割合平気でしししている。税金も、吉屋さん位になりたいのは山々だけれども、これは生れかわつて来ないことには、とうてい駄目なことだろう。

「だって朝日新聞にお書きになったでしょう」とも、話が出たが、一万円とまちがわれたのでは浮ぶ瀬もないと思つた。二十七回書いても新聞小説だし、二百回書いても新聞小説なのだから困つてしまふ。一日胸がどきどきして困つた。女学校へやつている姪めいの顔を見ても腹がたつて、「税金が増えるのよ、怖かないか」と云うと、怖いと同情してくれた。

「いったい、税金つて何に使うか知ってる？」と十五歳の姪めいに尋ねると、「ほら、大だいみょう名旅行つてあるじゃない、あんなのじゃ

ないの」と云う答えだった。そうかなアと思つた。

——私は、草花が大好き、花ならば何でもいい。冬の剪花は、手入れがいいので三週間位もたせる事がある。花は枯れてからも風ふう情ぜいのあるもので、曾宮そみやいちねん一念ぜん氏が、よく枯れた花を描かれるけれども、枯れた花の美しさは、灰々ほのぼのとしていて旅愁がある。女の枯れたのも、こんなに風情があるといいなと思う。私は三十二歳になつたけれども、同年輩の男の友人たちは、みずみずしくつてまだ青年だ。たけだりんたろう武田麟太郎さん、堀辰雄さん、永井龍男さん、はなあやめ花菖蒲だ。だけど、女の青春はどうも短かすぎる。——いま、せまい私の机の上に、小さいコップが乗っている。マアガレットや、菜の花や、矢車草や、カアネイションが一本ずつ差

してあるが、それに灯火あかりのあたっている風情は、花つて本当に美しいものだと思とれてしまう。今度生れかわる時は花になって来たいものだ。花だったら三白草どくだみだつていい。

花が好き、その他には、一ヶ月のうち二、三度は汽車へ乗つてゐる。旅が好きで仕方がない。旅の遠さは平気で、歩くことがとても嬉しい。この一月は志賀高原へスキーに行つた。丸山ヒュッテに泊つたが、幸い紅一点で、雪の山上で私はまるで少女のようにのびのびとしていた。スキーは下手だけれども、暴力的なあの雪を蹴つてゆく気持ちが好きだ。自然と自分とに距離がなくなる。十二沢のゲレンデで、私位よく、勇ましく転んだ者はないと云うことであつた。温泉へ這入ると、はい 軀じゆう青や紫のあざだらけに

なっていて、さすがに転びスキーがはずかしかった。

二月は、伊豆の古奈こなへ行つた。丹那たんなトンネルは初めてなので、熱海あたまを出るときから嬉しくて仕方がなかつた。八分位かかると聞いたけれども、随分ながいトンネルのような気がした。

熱海の海の色は、ナポリみたいな色をしている。温くて呆んやりしていて、磯いそはマチスの絵にあるような渚なぎさだ。——古奈では白石館と云うのに泊つた。ここでは芸者が一時間壱円で、淋しかったので、はと云うひとに三時間ほどいて貰つた。

三月は上州じょうしゅうの方へ行つて見たい。旅をしていると、生れて来た幸せを感じるほどだ。家人は、弁当が食べたいからだろうと云う。私は汽車へ乗ると弁当をよく買う。木の匂いがして御飯も

おかずもおいしい。汽車へ乗っていると、日頃の倦あき倦あきして
いることが、いつぺんに吹き飛んでしまって、東京へ帰る時などは、
田舎女いなかおんなが初めて上京して来るようなそんな気持ちになり済ま
しているのだ。

一時が打った

誰もよく眠ったのだらう

五万里も先きにある雪崩なだれのような寝息がきこえる

二時になつても三時になつても

私の机の上は真白いままだ

四時が打つと

炭籠すみかごに炭がなくなる

私は雨戸をあけて納屋なやへ炭を取りに行く

寒くて凍りそうだけれども

字を書いている仕事よりも

炭をつまんでいる方がはるかに愉しい

飼われた鶯うぐいすが、どこかで啼なきはじめる

これは、私の散文だけれども、夜明けに、こんな気持ちを楽しむのはたびたびのことだ。炭籠をさげて裏へ出て行くと、寒くて震えあがってしまう。だけど軍手をはめて、がらがらと炭すみ俵だわら

をゆすぶって、炭を一つ一つとつまんでいる時は、私が女のせい
か、やっぱり愉しい本業へかえったようで、楽々とした気持ちな
のだ。

夜明けになると、どんなに寒くても鶯が一番早く啼いてくれる。
どの家で飼っているのか知らないけれども、屋根の上が煙ったよ
うに明るくなるとすぐ鶯が啼き、牛乳屋の車の音が浸しみ透るよう
にきこえて来る。牛乳は二本取っている。母親と私がごくごく
ん飲むのだ。牛乳配達や、新聞配達、郵便配達、寒い時は、気の
毒になってしまう。夜明けの景色はいいけれども、徹夜をすると、
私はまるで皮でもかぶっているように気色が悪い。

朝御飯はたいてい牛乳。本当に御飯をたべるのが九時頃。御飯

は女中が焚^たき、味噌汁は私が焚く。幸せだと思う。仕事が忙がしくなつて、台所へ二、三日出ないと、皆、抜けた顔をしている。私は料理がうまい。楽屋でほめては実^みも蓋^{ふた}もないが、料理はやつていて面白い。

昼間は仕事が出来ないので困る。昼間、仕事が出来ると、近^{ちかめ}眼にも大変いいのだけれども、昼間はひとがみんな起きているから、つい何もしないで遊んでしまう。忙がしくつて困つても、友達が来ると遊んでしまう。友達が来てくれることは何よりもうれしい。日に十人位は色々な人が見える。疲れると勝手に横になつて眠る。家へ来るひとは、男のひとが多い。大変シゲキがある。――酒は飲まない。虫歯が出来たし、胃が弱くなつて、深^{ふかざけ}酒をす

ると、翌^{あく}る日は一日台なしになってしまふ。それでもすらすら仕事の出来た後は、どんな無理なことも「はいはい」と承知してあげて、酒も愉しく上手に飲む。仕事の後の酒は吾^われながらおいしい。酒は盃のねばる酒がきらい。食べものは何でもたべるけれどもまぐろのお刺身が困る。好きなのはこのわたで熱い御飯だけれど、このわたしは高くて困る。お金がはいたら鼻血が出るほどたべてみたいと思う。からすみも好きだけれども、これも高い。うにはそんなに好きじゃない。塩魚が好き、塩魚を見ると小説を書きたくなる。何か雰囲気があるから好きだ。巴^{パリ}里には上手に干した塩魚がなかった。

芝居も活動も子供の時からきらい。母親と女中だけは近所の活

動へこまめに出かけて行く。——絵を描くことは私の仕事の二番目で、石油の中で、固くなっている筆を洗っている時は、むずかしい顔をしたことがない。小林秀雄こぼやしひでお、永井龍男両氏に、絵をあげる約束をしているので、その絵のことを考えていることは何も云えない。私は静物はあまりうまくない。素人にしてはのイキだそうだけれども、その辺がちやうど面白いところで、描いていると、美しい色をつかっている絵描きがうらやましくなつて来る。

マチス、モジリアニが好きで、色刷りを時々出して眺めている。この間は、よろずてつころう萬鉄五郎氏の絵を二枚もとめた。萬さんのような仕事をしたものだ、その絵を見るたびにシゲキさせられるのだけれども、私はなまけもので仕方がない。自分の行末ゆくすえ、自分

の書くもの、皆々よく判っているけれども、雨か風でもきびしくあたってこないことには、このなまけものは、なかなか腰をあげそうにもないのだ。今年は何も書きたくない。私はいま世界地図を拡げて、^{インド}印度へ行く事を計画している。秋頃には、歐洲へ行った時のように、気軽に船出したいものだと思っている。何度でも初旅のような気持ちで、私は随分方々^{ほうぼう}へ行つた。貯っているだろうと訊くひともあるが、貯っているのは、宿屋の勘定書き位で、全くもつて、その日暮らしなのである。云えば、雌^{やぎ}山羊の乳をしぼれば、他の者が篩^{ふるい}をその下に差し出していると云う、そんなはかない生活^{くらし}なので、軀工合でも悪くなると、あれこれと考えるのだが、まあ、米の飯とお天^{てんとう}道様^{どうさま}はついてまわるだろうと思つて

いる。月黒うして雁飛ぶこと高しで、どんなみじめな日が来ても、元々裸身ひとつ故、方法はどのようにもなるだろう。

頃日、机に向つてしていると、矢折れ刀つきた落莫らくぼくたる気持ちだけれども、それは、自分で這入りいい処をただがさがさと摸索していたに過ぎないのだ。唯一の目的は、まだ遠くにあるのだけれども、所帯を持つてしていると、今日は今日では呆んやり暮らして、洗濯ごとや、台所ごとの地帯にいやに安住して眼をほそくしている。

私は「清水の如く特殊の味なし」の仕事を念願しているのだけれども、手踊りがめだつ、嘘やつくりがめだつて、何とも苦しくて仕方がない。女と云うものは力が足りないのかも知れぬ。癖の

渝^{かわ}らないことは勉強が足りないのだろうけれども、私は、前にも云ったとおり、こんな日向ぼっこをしているような文化生活は困ってしまふのだ。男の作家たちに拮^{きつこう}抗してゆうこうなどはつゆ思わないけれども、せめて、もう一段背のびをしてみたいと思っている。——室生^{むろう}さんのこの頃のお仕事の逞^{たくま}しいのに愕^{おどろ}いている。武田さんも随分あぶらがのっている。偉いと思う。みんな歴史を保持している人たちだけでも、よく疲れられないものと、その苦しみを考えるのだ。私は纔^{わず}かに七、八年の歴史しか持ってない。それも、自ら踊りを踊る仕事で、苦味^{にが}いことだらけだ。

清水のように特殊な味のない仕事をするのはこれからだと自ら反省している。

私には、深く行き交う友達がない。私はほとんど人を尋ねて行ったことがない。町でたれかれに逢うだけのもので、人の家を訪問することはまれだ。自分に倚り添ようてくれるものは、結局自身なのであろう。——散歩も段々おっくうになってしまった。ひまがあるとベッドに横たわって呆んやりしている。月のうち五、六ぺん、神田の古本屋、本郷の古本屋をひやかして歩く。とても楽しい散歩のひとつだ。割合、不勉強で本代はいまのところそんなにかからない。拾円もあれば我がまんしている。昔は、随分飢うえない浪費者で、何でも買ってみたくて、なりあがり者の気質を多分にそなえているのだ。なりあがりの陽気者のくせに、厭に孤独

で、孤独のなかの自分にだけは徹しているので、友達がなくても、そんなに苦しくはない。女だから、女の友達をと考えるのだけれども、自分が足りないのか、向うが私を厭な奴だと思うのか、のぼせあがるようなひともない。男の友達に心に良薬、口に毒薬で、なかなかシゲキして貰える。

詩を書くこと、絵を描くこと、いずれも好きで、自分の仕事のなかに、詩や絵の類似品を持っていることが、私の仕事の味噌だけれども、作家には、色々な波があってもいいと思う。今年は少し休息して、遠くへ行かれるものなら、ひとりでこつこつ目的もなく歩いて来たいと思っている。

青空文庫情報

底本：「林芙美子随筆集」岩波文庫、岩波書店

2003（平成15）年2月14日第1刷発行

2003（平成15）年3月5日第2刷発行

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

入力：林 幸雄

校正：noriko saito

2004年8月10日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

生活

林芙美子

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>